

古事記の神話世界における言葉の呪力

キロス・イグナシオ(パリ高等研究院、フランス)

日本で最も古い神話の文献である古事記を読むと、いろいろな言葉や文章に「呪力のある精霊が宿る」という信仰が潜伏していることが明らかになる。簡単にいえば、何かを唱えると、言葉の精霊によって、その言葉の内容が実現するだろうという信仰である。言葉に精霊が宿るといえば、「言霊」という言葉が心に浮かばずにはいられないだろう。確かに、「言霊」は上代で作られた言葉だが、古事記にはそれが一度も出てこないで、解釈手段としてふさわしくないといえるだろう。さらに「言霊」を中心に誤解や固定観念が歴史を通して形成され、軽く使えば学問的なミスが起こりかねない。とりわけ「言霊」に密教からの語彙が重なり、元来の「言霊」は意味的に変化してしまったと思われる。

しかし、上に述べたように、古事記にその信仰が潜伏していることは疑いようのない事実である。したがって、本研究において先ほどの偏りを避けるようにどんな解釈手段を使えばよいかというと、「言霊」というよりも、いわば「上代の言霊信仰が表す様式」ではないかと考える。その様式、即ち「言挙げ」、「言向け」、「言依さし」などの言葉が古事記ではしばしば出てくるので、それらを分析する方が、さきほどの信仰を解明するにはふさわしいに相違ない。

最後に、言葉の呪力に対する信仰が必ずしも言葉の意味に関連しているとは限らないため、上記の様式の研究だけでは、その信仰に関する断片的な結果しか得られないだろう。したがって、原日本語との境界に位置すると思われる古事記における擬態語や唱え事の分析も欠くことができない。日本書紀ではその表現がほとんど欠けているので、この擬態語も古事記の特徴であるといえよう。

この二つの調査を軸にして、古事記におけるその信仰の仕組みを解明できると希望している。